

* 今年の7月に行われた参議院選挙は、事前の予想どおり与党が過半数を得る結果となりました。自民党の政策が良かったというよりは、ライバルが勝手に自滅したという感じでしたが、これでいわゆるねじれ国会も解消され、いろいろなことが良い方向に進むことを期待しています。

* ところで、選挙で投票に行くたびに感じるのが、現在の選挙のやり方は良いのだろうか？という疑問です。中選挙区か小選挙区か、あるいは比例代表か、という変化はありましたが、一人の候補者を選んで投票用紙に書いて投票するという方式は、少なくとも私が生まれて以来変わっていないと思います。

* 全ての意味で最適な選挙方式というのではないでしょうし、ほかにどんな方法があるのか、と言われるとよく分からないのですが、例えば、マイナスの票を入れられるようにする、ということはすぐに思いつきます。今回の選挙でも、当選させたい候補者は特にいないけれども、この人だけは嫌、という候補者はいる、という状況はあったのではないのでしょうか？また、あらかじめ結果が分かっちゃって、選挙に行くモチベーションが下がってしまうような場合でも、マイナス票を入れることができ、その数が後で発表されるのであれば、少しは投票所に行く人が増えそうな気がします。

* しかし、少し調べてみると、この制度は余りうまくゆかないようです。例えば、マイナス票が集まりそうな候補者を擁する陣営は、よりマイナス票を集めそうなおとりとなる候補者を同じ選挙区に立てることで、マイナス票を分散させることができると言います。それに、そもそも、間接民主主義の精神に反する、という意見もあるようです。確かに、足の引っ張り合いのようで前向きな感じはしません。それでも、過去に導入した国もあったようですが、余りうまくいってはいないということでした。

* ほかに、もう少し良さそうな方式としては、例えば、「単記移譲式」というやり方があるそうです。これは、一人の候補者を選ぶのではなく、複数の候補者を、順位を付けて選ぶ方式で、順位が上位の候補者への票が死票になるような場合には、その票は次の順位の候補者へと順に送られてゆくという方法です。

* 一人だけ当選の小選挙区だとなんともないですが、それ以外の場合には死票が少なくなるというのは良いことだと思います。当落予想や開票作業は複雑になりそうですが、投票所に行くモチベーションに少しはつながるかもしれませんが、自分の投票行動を考えても、「なるべく死票にならないように」というのが投票先を選ぶ一つの基準だったりしますが、そういう、ある意味では変な努力も不要になります。実際、この制度はオーストラリアやアイルランドなどをはじめとして、幾つかの国の選挙（地方選挙も含む）で使われているそうです。

* 投票のやり方以外でも、例えば、電子投票などは一時期にはかなり検討されていたと思うのですが、余り普及はしていないようです。やはり信頼性やセキュリティなどの問題があるのでしょうか。更には、インターネット時代になり、直接民主制も技術的には可能、と言われて久しいですが、これもなかなか実現していません。国民投票のようなことはできたとしても、代表を出さないと議論による合意形成が難しい、というのが本質的な問題のようです。

* それでも、インターネットのポータルサイトには政治に関連する項目も増えていきますし、重要政策に対するパブリックコメント制度の導入なども行われています。（今のところ、どのように政策に反映されているのかが不明確ではありますが。）今後、情報通信技術を活用することで、投票に行ったり、特定の候補者を支援したりするだけではなく、多くの人が政治と更に主体的に関われるようになってゆくとよいと思います。

* 情報通信技術と政治の間には距離があるように感じられますが、政治の目的の一つが資源の分配に関する意思決定であるとすれば、そこにおける情報の流通は大変重要な問題のはずです。そういえば、今年の参議院選挙はインターネット選挙解禁された初めての選挙でもありました。情報通信技術と政治の今後の関わり方について、解説記事の企画を立ててみるのもいいかもしれません…。

（編集特別幹事 麻生英樹）